れんさい 監査の四季

第6回

鯖江市代表監査委員
川中清司

鯖江型の農業を求めて

実りの秋、空にはぽっかり白い雲が浮かぶ。のどかな田園風景が、ふと昔の回想へと誘います。

鯖江藩は禄高5万石―米の量にしてざっと12万5千俵。越後の村上から移封した当初から、藩の財政は困窮が続きました。

今、鯖江市の耕作水田は1680ha、反収8.5俵とみて、14万2千俵。藩政時代とは区域も条件も異なるが、経済の今昔をしのぶ手掛かりとなります。

親子で楽しむブロッコリー

戦中の日本は1人1日に2合5勺、年に約1石の配給で、国を挙げて**食糧増産**に励みました。今では消費は1／3に落ちて**減反政策**が進み、鯖江でも564haが休耕中です。

食糧の外国依存度の高い日本。自由化の波に揺れる中で、農業を守る意義は大きい。

鯖江の米の販売額は昨年度で12億2千万円、この4年間で2億5千万円も減りました。

しかし、**自立農業**を目指して、耕作を中核農家にまかせる**集積化**が進んで全農地の25％に達し、県平均の9％をはるかに超えています。

転作で野菜を主体とする努力も続けられています。例えば昨年度の大麦の出荷額は8千600万円で、4年間で2.3倍、大豆は2千550万円で9倍の実績を上げました。

農家の人が直接街で採れたての野菜を売る**さばえふれあい市**も、昨年は20回、北野町の特設会場で開かれ人気を呼んでいます。

生産者の顔が見え安心して食べられる**地産地消**へと、学校給食などにも広がりを見せています。